

## ＜第98回 国際ARCセミナー(バンヒロシ氏)レビュー＞

### 京都の大衆音楽のルーツを辿る～バンヒロシ大学 in 立命館大学～

斎藤 進也(立命館大学映像学部 准教授)

E-mail [saitos@fc.ritsumei.ac.jp](mailto:saitos@fc.ritsumei.ac.jp)

#### 1. はじめに

本稿は、「第 98 回 国際 ARC セミナー」(2022 年 1 月 22 年開催)におけるバンヒロシ氏、竹田章作氏(立命館大学映像学部教授)、斎藤進也(筆者、立命館大学映像学部准教授)による講演について報告するものである。本講演では、長年にわたり京都においてミュージシャンとしての活動を続けてこられたバン氏をお迎えし、氏のパーソナルヒストリーを辿りつつ、京都の“大衆音楽の街”としての側面について議論した。アート・リサーチセンターにおける「京都ストリート文化アーカイブの構築と発信」プロジェクトに所属する竹田氏および筆者は、主に聞き手に回り、対話的に講演を進めた。なお、本講演のサブタイトルとして、～バンヒロシ大学 in 立命館大学～とあるが、「バンヒロシ大学」とは、バン氏がこれまで様々な場所で開催してきた「授業型バラエティイベント」のことであり、本講演はその延長線上に位置づけられる。

#### 2. 講演内容

##### 2-1. イントロダクション

講演の冒頭において、バンヒロシ氏の経歴が簡潔に紹介された。バン氏は、1958 年に京都市に生まれ、1978 年の「アップルドルズ」名義でのレコードデビューを皮切りに、1980 年代には「のいづんずり」、「スマッシュヒッツ」といったグループで活動し、2000 年から現在に至るまで「Bambino」というバンドにおいて京都を拠点に音楽活動を展開している。また、かつて音楽好きやミュージシャンたちの交流の場として知られた音楽 Bar「万歳倶楽部」の店長でもあったことから、バン氏は、昭和期から現在までの京都の大衆音楽の現場を自らの目で見てきた生き証人といえ、シーンの展開を俯瞰して語ることのできる稀有な人物であるといえる。

##### 2-2. 京都と大衆音楽

つづいて、本講演の視座を明確にするため、昭和期の京都における軽音楽系バンドの展開が概観される。京都では、1950 年代のブルーグラスやカントリー&

ウエスタン系のバンドの登場を皮切りに、1960 年代中頃には、フォークやグループサウンズ(GS)のバンドが相次いで登場し、全国的な人気を得るミュージシャンも現れる。そして、1960 年代後半以降にさまざまなロック系バンドが登場し、カウンターカルチャー色の強い地域性が際立つようになる。こうした一連の展開は、日本の大衆音楽史において、独特の意味合いを持つものといえ、学術的な観点から体系化を進めることが期待される。

##### 2-3. バンヒロシのパーソナルヒストリーと京都のロック

本講演のメインコンテンツといえるバンヒロシ氏のパーソナルヒストリーに関する話題へと議論が進められる。ここでの議論は、バン氏の音楽人生における節目ごとに区切られ、Part1～5 の 5 部構成で語られた。

##### 【Part 1: 60 年代以前 ～ 72 年 前史】

バン氏の個人音楽史の前史として位置づけられるものであり、音楽活動を始める前のエピソードについて触れられる。1958 年に、バン氏は理髪店を営む家に生まれる。理髪店には、客向けにテレビが設置されており、バン少年は、日常的に音楽が流れる番組をみていた。そうした番組を鑑賞しているうちに、弘田三枝子や森山加代子などの曲が好きになり、口真似で歌うようになる。また、美樹克彦や「レモン・ルーツ」といった京都出身の歌手や GS のバンドに親近感を持っていた。GS の全盛期である 1960 年代後半には、京都に 100 もの GS バンドがあったという。

##### 【Part 2: 73 年 ～ 77 年 ミュージシャンとしての芽生え】

バン氏が中学生であった時分、藤井大丸の屋上で、「てるてる坊主コンサート」という無料で見られるコンサートが定期的に行われており、バン氏はそこで、河島英五ややしきたかじん、「キャロル」といった歌手やバンドの演奏をみるうちに、ライブを観賞することの楽しさを知る。そして、自らライブに足を運ぶ年齢になると、当時、京都を代表するロックバンドのひとつであった「都落ち」のメンバーである牟田憲司と仲良くなり、京都大

学西部講堂や「拾得」(ライブハウス)で行われるロックのライブを紹介してもらおう。西部講堂や「拾得」では、はじめて聞くブルースやロックの楽曲に触れることができ、大きな影響を受けた。現在もロックを続けているのは、その影響が今なお残っているからであるとバン氏は語る。

また、中学生時代の思い出として、ユーミン(荒井由実、現・松任谷由実)にまつわるエピソードが紹介された。二条中学校の放送部であったバン少年は、KBS 京都の「山崎弘士の GOGO リクエスト」という番組にユーミンがゲスト出演することを知り、放送当日、KBS 京都に出向いたという。当時、放送部に所属している中学生は、KBS 京都に出入りすることができた。そこで、実際にユーミン本人に会うことができたばかりか、二人きりで喫茶店で話しをする機会を得たという。かねてよりユーミンの「ひこうき雲」を好んで聴いていたバン氏にとって、この出来事はミュージシャンになったあとも心に生き続けているという。バン氏は、こうした体験を経て、自らもミュージシャンの道を志すこととなり、1978 年に「アップルドールズ」名義で MIX レコードより「あの娘になげ KISS」を発売し、デビューを果たす。MIX レコードは、かつて京都の円町にあったレーベルであり、もともとは演歌の愛好家等が自費出版的にレコードを発売することを支援するサービスを行っていたが、1970 年代後半に起こったバンドブームの影響で、ロックバンドを発掘すべくオーディションを開催することとなる。バン氏は、そのオーディションにおいて見事優勝し、若く 18 歳にしてレコードデビューを勝ち取った。

### 【Part 3: 78 年 ~ 83 年 「万歳倶楽部」から「スマッシュヒッツ」】

ここでは、レコードデビューのちにバン氏が店長を務めた四条木屋町の音楽 Bar「万歳倶楽部」の開店(1978 年)について語られる。「万歳倶楽部」は、バン氏の選曲による様々なジャンルの音楽が流れている店として人気を博し、ミュージシャンや音楽好きが集まる場所として知られた。『an・an』などの雑誌等で紹介されたこともあり東京のミュージシャンが訪れることもあった。講演においては、当時、「YMO(イエロー・マジック・オーケストラ)」のメンバーであった坂本龍一が「万歳倶楽部」に訪れた際の写真が紹介された。

当時の京都には、「万歳倶楽部」のように音楽好きの交流の場となっていたスポットがいくつかあり、「EP-4」のメンバーの佐藤薫がプロデュースしたディスコ「クラブ・モダン」もその一つであった。「クラブ・モダン」については、この頃、京都に住んでいると噂されていたグラムロックの先駆者、デヴィッド・ボウイがこの店を訪れた際、バン氏と言葉を交わし、一緒に踊ったというエピソードが残っている。紙幅の都合上、ここでは詳細を省くが、これもバン氏にとって衝撃的な邂逅であったという。

この時期から、バン氏は、月刊『宝島』誌上で「京都でなもんや通信」の連載を開始するなど、ライターとしての活動も行うようになり知名度を上げていく。そうした中で、バン氏執筆の記事を読んだダイヤモンド・ヘッズ・レコードの社長、大門俊輔氏から誘いがあり、同社から「スマッシュヒッツ」名義で「テルミー / 恋のハリキリボーイ」をリリースすることになる。これがミュージシャン・バンヒロシの全国デビューとなった。

また、この頃の京都の音楽シーンの状況にも触れられ、ニューウェーブやパンクといったジャンルにおいては、京都のシーンは東京のミュージシャンからも特別視される存在であったことが述べられる。その理由は、京都大学西部講堂に代表されるミュージシャンたちから憧れの眼差しを向けられるステージがあったからである。西部講堂は、1970 年代初頭、ロックのカウンターカルチャー的側面を体現する場所であったが、1975、76 年前後から商業主義的な風潮が現れ、存在感が薄れていったという。しかし、1979 年頃からニューウェーブ関連のミュージシャンの出演によりロック精神を取り戻し、西部講堂は再び注目を集めるようになったとバン氏は語る。

### 【Part 4: 84 年 ~ 98 年 宅録の時代】

ベース担当者の渡米に伴い、「スマッシュヒッツ」は活動を停止することになる。バン氏は、FM 大阪の「僕の勝手にしょ」という番組で DJ を担当するなど、音楽とのかかわりは保ち続けるが、結婚して家庭優先の生活となり、ライブ活動は休止する。一方、宅録による楽曲制作を行うようになり、この頃リリースされた「バンちゃんとロック」は、のちに「ピチカート・ファイヴ」の小西康陽に再評価され、2002 年に復刻リリースされた。

またこの時期、京都出身のバンドとして目覚ましい活躍をみせ全国的な評価を得ていたのが「ローザ・ルクセンブルグ」であった。「ローザ・ルクセンブルグ」をプロデュースした北山和可氏は、「ノーコメント」や「ノン・カテリアンズ」など京都の人気バンドをいくつも手がけた人物であり、1980 年代の京都のバンドシーンにおけるキーパーソンであったという。

### 【Part 5: 99 年~21 年 復帰と「Bambino」の時代】

バン氏は、1999 年にパフォーマーとしての音楽活動を再開する。そして 2000 年には、「Bambino」名義で、「すっ飛びひろし五十三次」をリリースする。クレイジーケンバンドの横山剣などメジャーシーンで活躍するミュージシャンとも交流を深めつつ、京都に根ざした活動を現在に至るまで続けることになる。2021 年には、2 枚組ベスト盤「Music is my life」をリリースするなど、ロックミュージシャンとして円熟の境地に達してなお、バン氏の活動は活発さを増している。

### 2-4. 展望

今後の展望として、「京都ストリート文化アーカイブの

構築と発信」プロジェクトにおいて、バン氏から提供頂いた資料を整理し、アーカイブを構築していくとともに、ポピュラー音楽学会などの関連学会で得られた知見を発表することで学術領域との接続を図っていく計画について述べられた。

### 3. おわりに

バンヒロシ氏の音楽家としての道のりを辿ってきた本講演であるが、個人史と大衆音楽史が織りなす魅力的な“京都のナラティブ”が表出化され、オーディエンスの皆様の評判も上々であったようである。こうした大衆音楽にまつわるナラティブは、アカデミック領域だけではなく、音楽批評やロックジャーナリズムなどの観点においても参照価値をもつものになるだろう。

#### [参考文献]

立命館大学アート・リサーチセンター。「第 98 回国際 ARC セミナー (Web 配信)」. 活動報告. <https://www.arc.ritsumeit.ac.jp/j/news/pc/009357.html> (最終閲覧日:2022 年 7 月 20 日)